

## 地域の取り組み事例 No.10



## 沖縄県八重山海域におけるナミハタの産卵場保護区

沖縄県水産海洋研究センター石垣支所 研究員 秋田雄一  
(独)水産総合研究センター西海区水産研究所 主任研究員 名波 敦

八重山諸島は、石垣島、西表島をはじめとした大小10の有人島といくつもの小さな無人島からなる島しょです。また、石西礁湖と呼ばれる石垣島と西表島の間の海域は、360種を超える造礁サンゴが分布する国内最大のサンゴ礁域となっています。この海域で漁獲される魚類は、200種以上もあり、八重山漁協セリ市場に並べられています。中でもサンゴを餌や隠れ家などとして利用する、サンゴと関わりが深いブダイ類やハタ類の水揚げが多いのが特徴です。



市場に水揚げされたナミハタの産卵群。

しかし、この自然豊かな海で育まれた水産物も、過去20年あまりで漁獲量が約半分にまで落ち込んでしまいました。その原因は、魚を育む海の環境悪化と、過剰な漁獲であると考えられます。この海域ではこれまで、産卵に集まった魚を一網打尽にしてしまったり(写真)、未熟な小型魚を多く獲ってしまったりするという漁獲実態がありました。

このような不合理な漁獲を減らし、魚湧く豊かな海を取り戻すため、八重山漁協では平成20年から、主要魚種には漁獲サイズ制限をし、多くの魚種の産卵場になっている5海域を3ヶ月間禁漁とする保護区を設定しました。さらに、平成22年からは、電灯潜り(夜間に潜水器を使って潜り、銚で魚を突く漁法)によって集中的に漁獲されているナミハタの産卵場を保護区にすることが、電灯潜り研究会の自主規制としてスタートしました。このナミハタの産卵群保護に関する取組を紹介します。

平成24年に設置した保護区の周知ポスター。保護区は西表島と小浜島の間に設定された。

ナミハタの産卵場は、石西礁湖内に何か所かが知られていますが、そのうち最も大きな産卵場であるとされているヨナラ水道が保護区として選定されました(前頁写真2)。これまでの研究によって、ナミハタが産卵するタイミングは、月周期とその年の春先の水温によってある程度予測できることがわかっています。そこで、沖縄県水産海洋研究センター石垣支所、水産総合研究センター西海区水産研究所と漁業者および漁協が話し合い、産卵予想日を挟んだ5日間を禁漁とすることにしました。期間中産卵場には、漁業者が作成したブイを浮かべ、産卵群の調査や監視活動がおこなわれました。



#### 青年部による保護区ブイの制作。

沖縄県水産海洋研究センターと西海区水産研究所では、この期間中、ヨナラ水道に集まったナミハタの密度を調査してきましたが、保護を始めた平成22年は100 m<sup>2</sup>あたり最高で158個体、23年は127個体(西海区:名波主任研究員)、24年は117個体と、非常にたくさんの親魚が確認されており、保護区設定前の最大11.4個体(平成20年)から大幅な増加が見られています。また、地元新聞への投稿やポスター掲示などの地道な広報活動により、漁業者の認識もだん

だんと高まり、保護区設定期間中の違反操業もこれまで見られていません。さらに平成24年は、これまで研究者がおこなってきた産卵群の密度調査を、漁業者2名にも実施してもらい、保護区の効果を実感的にも数値的にも実感してもらいました(写真)。



#### かつての豊かな海を知るベテラン40代(右)と、活躍が期待される20代(左)の海人(漁業者)。

このように、ヨナラ水道では皆の努力によって産卵群密度が大幅に向上し、産卵を無事迎えることができた親魚が大幅に増加しました。ナミハタが漁獲対象になるには、生まれてからおよそ4年かかることから、この取組によって産卵量が増加したとすると、平成26年頃から新たに漁獲対象となる魚の量が増加することが期待されています。

また、これまで産卵期には膨大な量を漁獲していたため、魚価の暴落を招いてきました。天候不良による出漁日数の変動などもあり、保護区による効果のみではありませんが、保護区設定以降は、産卵期の漁獲量が減少したため、最低単価や平均単価の改善も見られています。

このようなことから、ヨナラ水道におけるナミハタの産卵場保護区の実施は、漁業者からもおおむね好意的に受け入れられており、資源の回復と価格の安定のために今後も継続が期待されています。

